

公開講演会要旨

商人国家としてのアユタヤ——石井米雄

タイ有数の観光遺跡として日本人にも親しまれているアユタヤは、14世紀の半ばから18世紀の末にいたる400年の間、東南アジア有数の大国として繁栄したタイ王国の首都である。アユタヤ王国はなぜ繁栄し、そしてなぜ滅亡したのか。交易を背景に繁栄したタイ人の国家とその成り立ちを考えながら、現在につながるタイ王国の特質の一端をさぐってみたい。

東南アジア史のなかの日本

—新しい関わりのエトスを求めて——後藤乾一

非ヨーロッパ世界にありながら西欧近代を手に入れようとし、それに半ば成功した日本。そして西欧近代によって暗闇の世界に押し込められた東南アジア。この両者は、前大戦中の支配・被支配関係をはさみ、その前後、各50年ほどの関係を築き今日に至っている。

この一世紀の歩みのなかで、東南アジアからみると、日本の存在は私たち日本人が考える以上に大きな、ときに重い意味をもってきた。端的にいうならば、「極東」にあつて「極西」の国＝日本は、東南アジアにとって大きな魅力の源泉であり、かつまた絶えざる脅威の対象でもあった。

本講では、首相と天皇が相次いで東南アジアを訪問した今日の時点に立って、近・現代史における日本と東南アジアの関係を振り返りつつ、マジック・ミラーのように一方の側が他方を見れないというのではなく、真の意味で等身大で理解し合える関係を築くためのささやかな一素材を提供してみたい。

個人研究発表要旨

アジアにおける植民地主義とキリスト教宣教

—1910年エディンバラ国際宣教会議の討議を中心にして——蔵田雅彦

アジア・第三世界におけるキリスト教宣教は、植民地主義と帝国主義の尖兵の役割を担い、その過程で商人・宣教師・軍隊が三位一体となっていた、と指摘される。初期のポルトガル・スペインの海外宣教は政教一致の色彩を色濃く持ち、イギリスやオランダのキリスト教宣教も、国家の利害を代弁していた東インド会社との深い関わりの中で進められた。しかし、そのような宣教政策も、土着の諸宗教との葛藤や、宣教地の民衆による反キリスト教運動などの衝撃を受けて、徐々に再考を迫られる。戦後、世界教会協議会の一部となった国際宣教協議会 (International Missionary Council) は、このような本国および宣教地における国家と教会の関係など宣教活動に関わるさ